

平成25年2月4日

No 104

「あとからくる者のために」

詩人の坂村真民の詠に「あとからくる者のために」(あとからくる者のために苦勞をするのだ我慢をするのだ。田を耕し種を用意しておくのだ。あとからくる者のためにしみんよお前は読もかいておくのだ。あとからくる者のために山を川を海をきれいにしておくのだ。あああとからくる者のためにみなそれぞれ力を傾けるのだ。あとからあとから続々てくるあの可愛い者たちのために。未来を受け継ぐ者たちのために。みなそれぞれ自分で出来る何かを以てゆくのだ)があります。

私は、縁あって、平成6年6月高林会計を引継ぎさせて頂きました。数年後、所員全員で使命感「情熱で心も体も未来へつなぐ」をつくりました。先輩達は、私達に数多くのお客様を残してくれました。お客様があり、お客様との信頼関係もあり、私達の生活も守りこがでました。数年前からケレツク食いつぶしてきています。先輩が筆を置いて頂いたことを忘れ、自分が築いてい子のだ、だれだれは、何もしていません、思ってしまう。今は、先祖が苦勞を重ね、笑顔を苦しんだり競争で多くのものを失い立ち上がって築いてきたものです。今は私達が築いていく番です。「あとからくる者のために」今、自分が出来るところで、得意なことを行い、お客様にお役にたつ。新たなものをつくり出すための努力を。活性化させ、研究・開発・開拓としておく、自分一人ではない。どうしても自分中心になってしまいが、今を預けられているだけである次の世代へバトンしていく、それも、良いものを、正しいものを、人として、貯えがないと、次の余裕がありません。次のために、色々なことを吸収し、挑戦が必要だと思えます。余員が「あとからくる者のために」一つの努力の種や重なる目標を指したいと考えます。そして、私達も縁がある先輩が「結婚して、家を建て、子供達に充分な教育が与えられる」幸せになる。一人一人が目標を実現できる、努力をしていきたいと思います。

高林幸裕